

2019年3月13日 全3頁

2回目のメイ首相の離脱協定合意案も否決

メイ首相の合意案とスタンドプレーは再考の時期に

ユーロウェイブ@欧州経済・金融市場 Vol. 124

ロンドンリサーチセンター
シニアエコノミスト
菅野泰夫

[要約]

- 3月12日、離脱協定合意案に対する2回目の議会採決（意味ある投票）が下院で行われ、反対391票、賛成242票（149票差）と前回の採決（1月15日）に続き大差で否決された。反対議員の意見が覆らなかった主な原因は、投票日当日に英国コックス法務長官が、3月11日にEUと合意した2つの離脱協定の変更（共同解釈文書および政治宣言の追加文章）において、当初の離脱協定の内容を変えることができないとの法的助言を公表したことである。
- 合意なき離脱を回避するには、EUとの離脱協定合意の受け入れしかない、メイ首相が再三にわたり訴えたことは、むしろ議会からの信頼を下げることとなったという。ここ数カ月はメイ首相のスタンドプレーが目立ち、バックストップの代替措置についても、周囲の誰にも相談せず行動し続けたことは逆効果となったようだ。
- 否決後、EU側は声明を出し、英国が離脱延長を求める合理的な理由がある場合、離脱延長を容認する姿勢を示した。さらに合意なき離脱の場合でも、その準備を着実に実施するとした。ただし、ユンケル欧州委員会委員長は、メイ首相が主導しているEUとの離脱協定合意案が英議会で否決される限り、これ以上の協議は行わないと釘を刺している。

コックス法務長官の法的助言が引き金となり、ブレグジット採決は否決

3月12日、離脱協定合意案に対する2回目の議会採決（意味ある投票）が下院で行われ、反対391票、賛成242票（149票差）と1月の前回採決に続き¹大差で否決された。メイ首相は声をからしながらも、合意なき離脱のリスクを回避するよう、反対する議員に対し“改善された合意案”を支持するよう最後のアピールに奔走した。ただ前回採決で反対した保守党議員約40名²は合意支持に回ったものの、当初から頑なに今回の合意案の不支持を表明する強硬離脱派のリース・モグ議員率いるヨーロッパリサーチグループ（ERG）や民主統一党（DUP）を翻意させるまでには至らなかった。

反対議員の意見が覆らなかった主な原因は、12日（投票日当日）の午前中、英国コックス法務長官が、3月11日にEUと合意した2つの離脱協定の変更（共同解釈文書および政治宣言の追加文章）において、当初の離脱協定の内容を変えることができないとの法的助言を発表したことである。その中で同長官は、法的確約（法的拘束力のある共同解釈文書や一方的な宣言）によって離脱協定が若干改善されたことを認めたものの、英国がバックストップに終了期限を付与され、一方的にバックストップを反故にする権利を付与されたものではないとした。さらに今回の2つの変更が、英国とEU双方の主張が食い違うなどにより協議が行き詰まった際に、英国がバックストップを逃れる保証はないと結論付けている。同長官は、この結論を踏まえて、今回の離脱協定が正当化できるかどうかに関しては、各議員の政治的判断に委ねるとしていた。ただこの法的助言が発表されるや否や、今回の合意案を支持するかについて明確な回答を避けていたDUPやERGは、一斉にバックストップの変更は十分なものではなかったとし、今回の合意案を支持しない姿勢を明確にした。

メイ首相の離脱協定合意案とスタンドプレーは再考の時期に

2回目の離脱協定合意案が否決されたため、メイ首相は、3月13日に合意なき離脱の是非を問う採決を行うとし、党議拘束をかけない自由投票にするとした。現時点では、合意なき離脱を議会が拒否（否決）することが予想されているものの、強硬離脱派と親欧州派および労働党幹部がそれぞれ異なる結果を求めているため、どのような投票結果（特に否決の場合、どの程度の僅差で否決されるか）となるかは未知数である。

メイ首相は国民投票の結果（EUからの離脱）を実現することに情熱を傾けており、その実現にはEUとの合意を伴う離脱を選択することが最善であると語った。ただし、議会が合意なき離脱を選ぶのであれば、政府として議会の決断を尊重するとした。今回の採決で、仮に10票～20票差の僅差であれば、メイ首相が離脱支持選挙区の労働党議員の取り込みを続け、再度、議会への合意案の受け入れを図ると考えられていた。ただ今回の採決も大差（149票差）で否決され

¹ 1月15日の1回目の離脱協定合意案の議会採決は反対432票、賛成202票の230票差と歴史的な大差で否決。

² 今回の保守党議員の反対は75名。

たため、今後、メイ首相の合意案が議会で承認されることは困難との見方が一般的である。代替策をほとんど持ちえないメイ首相は、むしろ、合意なき離脱に関する議会の意思を無視し、3月29日の離脱日まで時間稼ぎをして、合意なき離脱を実現する可能性も否定できないだろう。

合意なき離脱を回避するには、EUとの離脱協定合意の受け入れしかないと、メイ首相が再三にわたり訴えたことは、むしろ議会からの信頼を下げることとなったという。ここ数カ月はメイ首相のスタンププレーが目立ち、バックストップの代替措置についてまでも、周囲の誰にも相談せず行動し続けたことは逆効果となったようだ。

EU側は傍観姿勢

否決後、EU側は声明を出し、英国が離脱延長を求める合理的な理由がある場合、離脱延長を容認する姿勢を示した。さらに仮に合意なき離脱が起こったとしても、その準備を着実に実施するとした。ただユンケル欧州委員会委員長は、メイ首相が主導する合意案が英議会で否決される限り、これ以上の協議は行わないと釘を刺している。昨日(3月11日)のメイ首相とのストラスブルでの会談でも、再度、離脱協定を修正することを頑なに否定しており、離脱延長が決定したところで、EUとの再協議はほぼ不可能との見方も根強い。トゥスクEU大統領も、本日の採決結果を受けて、EUは英国との合意形成に向け、できる限りのことをしてきたため、これ以上何ができるかわからないとし、現在の膠着状態を打開する解決策は英国内にあることを示唆した。

また、たとえ離脱延長の投票が可決されたとしても、延長でEU側が認めるのは(5月23日～26日までの欧州議会選挙の英国の参加を回避するため)5月23日までとされており、現実的にそれまでにメイ首相が合意案を議会で説得できる可能性は低い。このまま解決策が見いだせない状況が続けば、急速に合意なき離脱が起こる可能性が高まるだろう

(了)